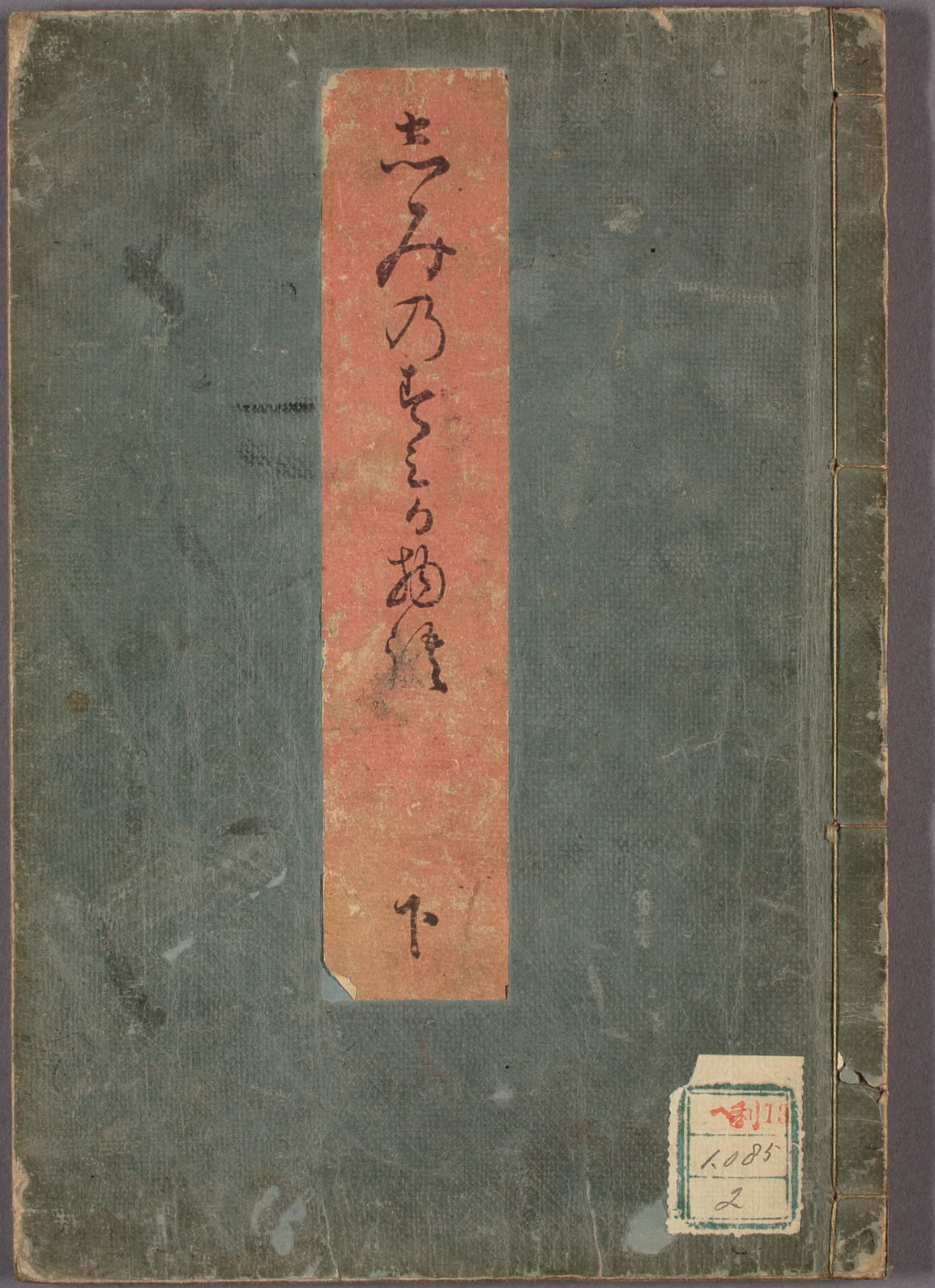

別13
1085
2

門 へ利13
號 1085
巻 2

志みの物語下目録

家司壺なる結果をとらむとする事
陪従春近下部に雪佛我作らせる事
價二百あせる柑子乃事
大進有恒が妻閻王の廳ようつまふる事
餅を買て拾子を拾ふ男乃事
蝨をとてあそぶ翁乃事
紀直方兄弟乃子を論ずる事
宮司少し法師闘諍ふおよべる事

桶工暴風をとろしぶし奉
家危く成る男を妻いさむる奉
文字しらぬ男出家を頼奉
大夫郎弟子をあるに奉
戀やこし給姫君の奉
人宿しらく物とし無とをるに如此奉
かゝる事博士まはいまて書借んといふ奉
越前守が親水仙花を覧るに奉
未央宮の尾硯重寶とする奉

小面実持人をやらふ雇ふ奉
奴人従者残雇けむとをるに奉
椿市の宿事此奉
琵琶法師夕立に逢奉
竹垣をくぐりもく首出ざわし男此奉
袴着の姫君をいさむるに乳母乃奉
学生源の廣が家のもらを乃奉
検非違使の下司とかゝるに人の奉
某入道のけらを柳をまもりまもるに奉

同童藁にふしくいねこれ事
丹後國の痴人龍宮にゆきしる事

○あるこまもちに、ある絶けいこしありしなるとこさより左公せしこのなりとて、何もれこめしたらひ給ひしなるもある時かく乃結果あわを、むく椋の大さにしたらせる事、壺つぶよいまて、きちしめしたるもあり、このたぶを、うらくにふよりまこしまれ、このふくゝ、云おくゆるもぶ積たるにて、くちハ手てさしいるくばかりせだくそれ、ぬくらかにつくわ、夜ふこのなるも、面ふわ、さうくこしかまきまきばかのけいこしめしいでゝ、このぶつませたせおりしこるにが、かのたぶをいぶさ勢行ひてとりいぶしこるくへとの給ふ、あいこしおづくゆぶ、我をぶ、えく、壺の口よさしいまなるにぶ、ぬかむとするにぬかりこぬかれど、とくすれども、

ぬおえざるもなれば、殿よしれさまのとらすゆゑて、老人に
うさめ見すなかはとくくるしがる行ふ、人ぐまとるまで、
さぬく志あつうへど、ふつにぬあげ、志乃うへをせんをべ
なし、にるさ宝るしがとも、うちまりて、いぐしれまとて、
浜の如意とりて、かまたおきて人へば、法ばを三四よりぐこ
ゑまくと云、蔵ぬ、人くよりて、あいしがきをまんまじ、かく
れあハ二十ばかるも、つうみくをるも、さまじバおそぬあざわ
法まとて、これ法あしろひ、にくこあへるも、はらざくなる
きえせけいしハ、おかるこかるおしろをば、と後ゆに
法かひなれ、をのとぞ、
陪従春迎といひけるもの、雪いたうふりたる裏、す乃志

にいらうゑ火桶の火おおいさせ、かたざぬのあつきへる
をかさ称きて、ゑおけいしはおて、庭におるも、志を通
よ云て、ゆきをあつめて、鬼のうち、おとけのかたれど、
法ならせくそのむかし、中宮の御庭におろ、雪のやア
つらせまゑ云しか、かゝれをのそいゆゞこまあしあじ
ゆゑ、ゑつがよ入く、奥じたるに志をべハ、まくうすさ
法ばま云とつきたりたれハ、さまたち男よとはるまて、だ
ふる云にぬるひをまども、主乃仰いなたん屋うも
なくて、志ゑなきしけくまちはしまたるを、春迎を
云とわとろおだひて、あらおりしろ、志の雪佛のうれ乃、
をうしさよ、かぞうるもれ奥をまゑこあらじをとて、猶雪に

ぬまに行く。庭(ふた)をまちをるまゝ。ゆきハいやゆさりにふり。衆者
いまくふまゆおなれ。いよく思ひまゝ家にくおの雪まぐ
にあんむハまんれし。汝哥(なんぢうた)云とつ法ろうあつまとゝいへば。
志をべとりもあへば。
風さゆ頼よはいまもいはす起あるもあるじやおとり
ふれれ志雅雪。いまもちやのにいふくとくおのかざしふ。
にだていまぬのち乃かんぶうをもおそれぞ。はらぞ
志おるくに。いふ云なれるべし。
某(なたり)乃大納言(ごいなごん)乃太郎(さらう)君(きみ)いてくまづらはせ行ひ。おのの
法やくこさしめさず。法まちの人ゝあしをうらにほし
て。何まてまどひ。どこさゆうれ法師ならんのかんなぎなぞ。

かゝくふのゝ志るまさまくかゝて日数なれとも。よろこしうも
あんさせ行ひ。父(ちく)の大納言法ゆくちくより行す。
いふかうこのもこさしめさでゝ絶めをば。あんを給。付ふ
まゝ。すしもそこのきこしめしてよ。いまは洞(ゑうぐ)ふむをぞ
てのまゝるへバ。太郎君。いさのしつふなに。おしとも。おもひ
侍らぞ。さまいまあ。ぬうちにのつるふことの。まりれなれバ。
せめて柑子(かうじ)云とつまうべきす見まし。いまの行ふぞハうまき
しまあなりとて。いまく人はしらせて。おいまも行ひ
なれぞ。これづお乃おろまわなきハこやおゆうおま。
あさ人乃家。あなぐるまゝとも見つまど。なしとのゝ申候
大納言いらち行くちぐれまうらもなにかをしらむ。

そもじあらひをほのまて、ことゆめておもひ給ひ、秦(たぐ)
武安(けやす)といふ者、からうじて、伏見(ふしミ)のなりにて、柑子(かうじ)なる川、
ことゆめこゆこさぬ、あらひおもひ○二百両とうこさおくし、ゆくく
もてゆめなるまゝ待ぬ、まづうふなりだをぶに、まゐらず、はゝ
まゆぐはつかたるも、いさうのこのぶにこさおしめさぐるもなる
をたふだうり拘まゐり行へ、うましうるもなりとて、武
安まて、おりく勧賞(けんじやう)ありて、おめさせ行なるも、さてのおもひ
たる柑子ハめぼらかなるものれまゝばとて、小野(をの)まにハ
もあるこざるの御ことゆへ、まゐらせ通しとて、まくつまをを
至すを御使(つかひ)にて、出しまして行ふ、武安がおもひ、柑子の
へまるかつてをこもちこ切なるが、七(ぎつ)のあらひ、二百両ゆく

きて、おもひにおもひなるハ、六にてもよ紀あまるのこの
なり、おまゆめもこそ、人ようゝ聞しかば、よ紀あらひを
えゆし、ゆくおもひて、武安が道(こち)にて、やもらひをるゝ所を、
うかぐひて、かゝりてこうちかつぎて、いづちともれくにおもうせ
こまるもおのおもまものいるるあらひをうえまりたむいぶ
りとし。

○大進(さいしん)ありほ○がほ○ハかまち見にくくて、おろまゝがく
しなく、おぞやしうるもなり、つ○にあゆほ孫とちおるまて、
まれおもまりゆるもかなりずおと人をなむ人行ひう、
とひひなり、ありつ○うるかさた積とさよおろもハいかで
なぐひらへまりしてゆるもけるさぐるまるすくせ

にやこの事なるまたために面をてこうせぬ。ありけれのちの事
れぞいとまゝ日数面になるのち。おうしお人はもとめられ
て。まことはたゞをむかへたりける。はじめ乃さぐるものにつ
ぶまとハ。こよなうよりまけまゝバ。むつかしくなれむつび
たり。かくてかの志まいめハ。よもつくにくありて。此事をき
志ま。閻王乃廳にたゞゐるまて。うらへてやさくありつゝちぶ
まりしおとをまもぐへて。おと人をむかへ侍るに。このうらこゝ面
むかへれく。おぐへさふらへバ。いたゞ幽霊になりて。かしおかり
いまり。松山ゆゑ波かゝぬむとハ。ちぎうざりしあらむくを
まかし。おばし呵責乃いとたまぐれ。ことさしゆ。閻王
かしらこゝざゝぶるまて。うちふるまて面おまゝ。おまいめよ。うも

いうまいといへるこのそかかさまうかに髪ながく、いろ白
く、そをやうなるすがたしてあり、いでそこめ、おのときさる
みにくく、さてあれにおもくちして、さるふるまゐをまゐさと。
ふさたしうらは、お乃事かねたじ、ぬくあるもしぞけと
のそそふ、かこいらるおらせろ、あいねとやおりしたむ、女が
袖をいへく、幽霊をかしむし、秋叉ぬしなるあし、ときさ
えなかせうしとぞいいけるに。
ある云と、大佛殿をこがこて、かへさり、あいりれるつき人
のいへにそちよりて、いへばとにそちひかたでやとてあるに
て、いとけどやうなりけまだ、いかでまゐそちひよ乃つゆに
慧にず、あさてしくつらりしなぞいへだ、あき人さいの

こそちひさうらず、志ろの行ふハ一ぢやう大佛殿を拝こ
行へるなるべし、かの大れるにはなとけをたいしそまへるに
めうつしにそよろづのこのこゑさやうにしなんゆき。
ぬいへだげにさるに事あるべしとて、こちひをふさろに
いまて、一二町あゆこゆおくるこちれたるにかぶろなる
こどわこの人のすてそれにや、すどろに祢ぶりぬるに
をうんく、あれいとれし、母にをひねろ、ゆめこうるにしろ也。
あつまがるそ、ゆいぶにこゑ、まこ四町ばかわ、あゆこに
ぬが、つまるにおもくて、こうだにまゐ、志ばしいこをむ
とて、かにおろして、ゆをまゐりこ猪が、老たるかこのれ
尼ぬくあわかれとぞ。

ある所乃大饗に。中間しかるに御門のあつまりに。むしろ
うち志きて。かし給ふをあつかひうちして。をかしあるなり。
おほちこそるげなれ翁の。いでめきあひに興あるわざ
して。こせむしやうくばうしうしろをなげ。いふとみちめ
くるしやまりとる。翁志らこえしやうといふ。人々に見ん
せくいとたかの蟲のこしておほ所りとるまいでして。こせむ
ず。とつひて。志らこゑを日ふ。道。右まくるに。歯うちたをし
て。こゝや人々志らこゑをはやしのんびりに入川。さていた
のんびりやみいたるをふとまはりのぞみす持ちて。ふところを
さぐりて。志ら紙をとりいでし。こせむらひあざむく興
徒ぐば。中くりの志らゝをくちにいまりこしておのすべし。

人々のぞまするに。かくせむや。いでしてんとのふ。さりばえならぬまゐ
あまりなるといふせらへば。えならぬをかい。さぐりて。とりいでて
こせむさて中このこそ。えびらしとりの人て髪のあいだ
よりをとりいでし。あるいはきれいなるものも。いでしつ
こせならも。かさつまるこの。ふぐりなるも。いでみすべしやと
人々がなごりいでさて頭むとて。くちみいまえをつまらぬ事。
常に紀にる。がふくり給ふ。えぞもおよけつ。さくだ
て。くえくよそ。ゆびのさ紀よ仕まして。いでしまう紙に
まじばちじめの小を似ずりうち。むらめなする。翁のふところ
まで。うめのきをるもの人々にはなるいまでる。このふそであら
げるまなるとさかるそでも。志らこゑ翁らなる翁々ふ

やまあがりて、いちだんとすゝむふしのとよみを、よくわかりたる
かゞみけるは、奥さまにて記しおきてあるじも垣下の衆ゑんざもち
ことごとくおぼろげならず、何事ならん子細をきかせ給へ。これ
はなせさせしはべりぬ。
右兵衛尉紀直方(さいやうゑのぜうきのなほかた)とて、世(よ)の御まへにたちまゐりてしは
はしめといふつけて、よき人なりしが、兄弟(きやうだい)の子を
まつりしが父に云ひしは、われいまだそのにあらずありける。
或(ある)と記す弟(おとゝ)なる人の兄をこのみて、よびたるは世にまれなる
まことの御ありがたき中に、釋迦佛(さかぶち)の御たん會、誕生會(たんじやうゑ)
ちなみにいふ、さきの御はらからにて、させ給ひて、御まつりて
卯月乃八日にとりおこなはれ給ふといふ子細ならん

ふかくものゝいへばうそをあんず。さりながらかなしきは八めでし
がまんなるならず。すべて乃人あるは二月(きさらぎ)よりはじまる。
卯月に志めくくるれども、おどけは禪通(ちんつう)おりて下せ八生死(しやうじ)めん
さる云ふおそれある人よそに、いよいよにして、志紀をさす
志に、おのれ總じうかれ出行人ありしが、仏ゝ申されは
おりしも猶又人は父云よ月なるに、とりおこなひてゐるを
本郷よりいでしお文学ものありけるが、かくしても、おはら
屋本乃まで推しはかりたる事の、ことしかりんとては
めよろしからじなれ。
むかし某乃國(くに)乃山(やま)すみにて、よくよく法師ありけるも
ひきうちたる人の子どもを、これ切しはふゆさえて年ゝ

をあぐて法師がかうべまるはばかわにうち門さてひき
ゑしてよつ下になわてどどらあひまするとむら乃をさ
きつあてひおまけなぐむまどもかつてにはらたち
てうあひかず法師も高目もかかりしらをいまず大
なる柑子うちつあまりまゝ屋うにたまあがるまぬ されば
がら屋むべきなるねばいかにもあ積高目の内まへり
出くたものこころあ起らめゆすべしとていまさを念
ごしておりし文をもちて廳よいでぬ守大にいかるまる
およろ高目をこさよくあつこさおろをもちいまきく
まいりて神に法かうまつるまつり道るまで法師も柔
和をもて人をこちぶお後乃世のたとふどと起らす

麁ぶをおのまらまけじおろ乃法よく、いさうひうち
あふて、疵をさへ蒙るまぬること、志づ山がつふた、おとるも
まるこころなるをや、よしあしをいはず、其の職をあし
はふち、とかくおひやらふべきことも、このおろんぞ、
ふくおりしく、つゝ人のいでくることを、出身ふかへ、なげかせ
おりしませば、おのまじれとがをゆるしつ、おのれらがいさ
う云のちじめハ、桶といふ字の、かんなより、奉おこるもぬこ
きあがおとわるべきおとなら孫どまくるをうふへおとの
おおらざなるまもめふをしへ志らすれるもかんなつゝ云
のおと志るせる書ふ、おもこをけとか紀るハ、本をてつ
くまる、桶のおとふまあらず、かんむもかしおまきぜ

顯宗天皇、仁賢天皇とさおくなまるハ、御兄弟におはし
まして、兄乃こゝおを億計、弟みおを弘計とかなるし
おのおろんなともにおけをけふて、かゝ紀まやすれば、
かん姫のおかゝ、まがへじとて、弟こゝおをうわに、こをけと志る
しをたて、かん姫ばかりの書ふ、かおとゝめ、をてしを、後の
人を日本紀をぶに、えよりざれハ、先達のおろをちむも、
いろづらになりて、おけこをけハ、こづいるくうつハぶところ
えあやまちなるるわ、まゝ桶乃假字ハ、服あその書ふ、
乎計とかまこれば、そまこまよるべおおとまわなぶ、後の
世とれるまても、歌のこちにも、まてこるその節の家々
ゆきハ、おのく師ふ志らがひて、をしへのこゝにかんおと

もさもあるべしとやすれかくやのまゝ。至く好む物ありがたし。
さるにてもにざる闘諍に及びぬるまでと奇怪なりとて。
ありあまて歴のよふ好ひ至りぬ。家内も法師もひそかに
いひいでし酒をのみてこぶのいゆるほど五十日ばかりかご
をとゞしおもわをわるるかなや。

○

都のうちつゞきに楠をつくりてうる男あり。秋のころ風
もはげしくふきいでくるおびいたる家をうちたりて。木
の枝をとさんなどうきを絶えずすびてごやのいちのけふれる
がらそのまゝぞうかさぬ。されどもこのあけの飾もぬさまのかれ
するものち楠はくろ妻にむかひて。この家をたちはなむ
座ましむ時きぬよく神の御まへに 神酒 粿米 ひましよ。○なるまでとまい

いふ法師のうち絶えげしうまよとて家のうちむくへお道理やさ
あるけふの事いふ男かれよへば女はあさましきまでものく
こゝろ能ぶどうしるぬをのぞむわしかりしゆゑ米買居よれ
しげうちよ人よりが身いかふすりいでかれむといひたるそその
法師のことをいまぞ捨てけりまぢなるがなどかく夫をいふ
ど絶行をとらんとわたるをとゞくやさつるぞまあしをとぞある。すべ
て男のいへるをいひきさ。おのれよりまさぬにまてみなさへよ絶す
るあらじよふ妻きちいかゞ家風につげて何条よ絶さち
なるよふ人ぞ夫かいろく風ありて吹ぬれば膀ぬとうけたるに
あまそ人の眼よいづかりしされば目をやむ人おほくいでき
れむ。これようあびいなそべきさらんとそとのふよ法師

いよくいぶるまで人のめをやむがいかで家男乃さいはひ也
ハなれとしへバ夫ふく物のおろたどらざる人を指のとし
をえしらじめを頼ふ人おわりまぞようをずバ目はぶ
まで。かこえとなりぬべし。さるかこはなりなバ法師とし
ろなるべくれ。めくらはなれ。かくしふよりまこ
しる。三絃（さんげん）といふもの弾（ひき）くなりたゝとすれるも。さらバ
三絃よのなりに於ハれとれぬべし。これまぐるあふよお
さちのさくれるれるもといへバ。妻しろ三絃の世ふをやわ
ゆくぬるも。男乃さいはひとなるべうも。れしといふ。夫そも
三絃を。稱ハ乃の皮（かハ）をもて。つくるなり。三絃のけゆりゆ
うバ。世にあるとしある稱ハ乃のうぶつまちろ。あきこす。

そ○はおぬべし。おまとよ紀さち乃まぢりくさくれること
いふを。粉いぶるまでとへバ。稱ハまちふこ。なば。嵐（ねずミ）と紀をえ
てもびこるまくわやのまゝにさずきをいはず。こちの取ずミ。
おこりさまざよろ川乃桶とも。これくひやぶるまあるを
なげおしてくぶ紀をいすひつべし。さらバまぐ家にあさ
ものく数まさるまでとこさりゆべおものなるもやとも
うちまくおてをどわよろおぶたるまふりおまもどわある。
桶まくこふぶ。なりたる。
○おまとも同まくわのあさびとなりはひのこちにまつやく
おろをまちひず。家とぶしるくなりゆおていまハくふ
歯こさ。物ぶにまくなりぬ。妻なりけるものうらこいさ紀

ていひたるハあまりに身におもはぬ。こやびをのこ志のこゝ
月苑にのこうるまゝありおもはるへバかくおちあふまゝて
侍。こ和口秀乃いふひなりひなおよるまゝおこつもしことゞかし。
とゝりれるにあるゞしをこゝもはるへあしてもくゝさよりておも
いでゆふべハ子(ね)ゐ(すぐ)るまて起(おき)ぬてふゆの雪氷(ゆきこゝろ)夏(なつ)の
日のてりもをもくにもまぐなりたひを大事として。
立はしまはとめめれバとしくいへゆるになりたふとれる
てもにふる苑福者(うしや)とハ能にもわわぎこもとなりれあるじ
りなひて。いまよるまなりハひにこゝろをもちひ行く。
ふたびゆ家をとりしるにしむしにかへしをはるへゆ
うちなこゞこゞこていへバ男うちはしまちてこちなき

人乃うへをとりれしくあがこやびおろをしも。ゑん所
しやうちたちを母とする。おろかなりとれるれあるじハ。
よるに云るをいたず。はし里河ゐ苑あるうさるにいたふひ
まぐになく。云とひもやをおこゝろれしおちぬてをのし
めるひを。ぐ志をすゝ乃はぶをわ。ひと云のこゝなり。まづか
に云と日のどやうにをの志も母とておられ一と物の
日数をくるしこあへおて。ゆる苑まどひれむおといとも
いとも。おろかなるおろにふけ。さるにむ志んの人れうへを。
まゝハまれだじやうひこゝ。いよく河ざまゝあそびあり
きけるにとれむ。
そのうくをべぐに志らぬ。志まゝそのありたるまゝいかり世紙

おもふらんじにまもむ。ふまのがまて出家してたわ。志ぞく
なりける人をつゆもりそなどてかうハおりいすて行ひたる。
何さましといへば。ゆめ酒がろしれ世に。さのミに心ぐむ
麁しやハどしみ祢ゆゑ某をうちつ乃あそなどの。返
うおこころだへのうち屋ましまて。かくハのがれつるとと
いふ。けしバさもあとさらめてけへなむ。法名をバいかゝあら
をもめ行ひつるとこへバ。さいおんと師乃法ゑてをまへる
なりといふ。いかなる文字にかゝとへバ。さいハ西方淨土の
西にくゝ侍るまさておんといふ文字こそ見なれざるに文
字にてあまき。真字をてかゝつまバ六百乃文字をあ
はせるに屋うなわゆりこ草をてうおつまハ七百の文字

をあハせたるなわ。とぞいひたるに志ぞくなる人をうし地と
念じく何に屋うける文字にて侍りといへく。いと見
ひ。心をくぶりていふなるまかるに人の道におこしたる
事なかく堅固なるものぞと。人いひおさる事ありや
志らず。
大左郎といへに。ぬまびとあるまたるまで弟子ども幾あつめ
て。ぬまをます麁にやうをとしふとていひたるを。人の家に
志乃び入まると地。そのおとのを積ぞ。ま家乃名。こそく
法をてうならぬこそや。ぬとが見なむ。其の時に屋ず
して猫乃名をなしまゝ。ぬすこ嵐れ名をなすべし。志らす
まバとがめ法にその。さハ祢こねすこれさまぐぞ。とおを

ゑくうちとけて、いぬるものぞ、やまこうちいらむずとて、戸
をおしがたんとするに、閉ふくなにものぞなどいらぐ、犬の聲
をせよ、又えびのかしをとりてりくくふ、蒿をすべしなど、
さ乃ぐかしときおとゞもとしへたる、甲子どもとしへられつる
風うに、さ四ぐれ、ゑをまゝ稱いふ中ふ、一人のいまゝゐり乃
ものありたるが、いでえびのかしくふことしてこんとて、とざ四
りいでく、戸れもとにまゝずして、かしをとりて、おのくらふ
やうに、おとゝそつ、閉ふきゐる甲子どもやまさしくおのく
らふよまゝがしず、あけれかしおくも志たるかれとおむまゝば、
大太郎きて、ゑはよく似たれどまちながらくらふべき
ふあらず、地ふふしゐて、せよとぞいひたる、ぬすむ此乃

こちにくゝ、志乃大太郎はまぶる、かしおまものはあらざる
きと、こらけれたる同類乃君のかたるまたるふとなす、
むかしやぶとれよ、御まゝわよ、いつおかしぼき行、姫君れ
けしあり、御かたちなべてのきたる、れけしまさずてう、見えた
ゑゑ、かいゑおまゝふまちぐも、けしうハおもとす、この
姫君、うづきのはじめよりまゝ、御おちまいはまゝがひて、なや
ゑがちにふし給へまとわまてくおぼとくるしが、雖せ
行ふとうろも、見くまゝ乃ハねど、何と行く御うれも御面
れく、やせかうまて、おもものなどもをわくまゝわまゝハぞ、
ちくぎみ、心ぐるしがまゝ行く、寺くに御まて、御祈るどおち
まくおまゝまへとも、なかれるじさ四ふく、月比まゝりぬ、ある

ひ出てなくひ乃かゝのはつゝふ。
あ乃やそまゝ志ゞ来なる雅おくはゆハまゞ云とわ
孫のとまゝなつの花とくせ行へまたるを侍(じ)徒(ら)といへるお
ゝまゝ云とおまをとりて出めのとまゝざりしまゝちゆき
てさゝやおけるを云め君の御ありさ母を見ゝまゝすれ
バとのはゝ乃出やまひとしも見ならずとわゆさんも
かしこ乃まゝど出としも十七におりしませバ云し人を
こひ行ふ出ゝろおりして所をさ御身をなげかせ
くんじ行へふふやといひてかの出てならひとりいでく
ゝすれバめのとゝまをうちてさるまゝりく此ゝよくとひ
まゞ乃まゝまて後(うの)まゝさまへなるハいかゞる下藹(げらう)なわ

とゝむこゞ乃とれし行ひてん物よく姫君まとひまゝて
まつまて。あらハふさまへなまてんとて。二人うちつまて。
御枕かゝちかく来て。かうちハへ姫をせ行へふおと紙。
父君ハさられまゝ御ゝまつまゝ見なふ人くまでこゝろ絶
おとやゝんかゝこゝろハず。いゝで云とひもはやく。とこゝろせ
行ひなまことを。神仏ふいのまゝ侍く。こふこと(齋)絶りて。
目をまゝし侍わ。こしゝ出ふかゝまさせ行ふおとありて。いゝで
かくれ心ゞおもなすことおハさば。あめ乃おくをさりし両
ふなしてもこまゝろ乃まゝに。なしなまてむ。御くまで。おい
らかふおなせ行へしとゆせば云めこさゝすてしなぢ
らいまゝひて。おくゆくこゞのとゞかまのくゝひさて。

らむ人ハ、慈人（こひびと）ゆゑハ、をめとのゐひ、なるゆめのとも侍従
ゑめをくハせつゝあこれく、をもち志るをまけるが、まゐ
志るさけバ、あぢ絶れくなぞいひ志ろひつゝ、廊下（らうか）をは
しまて、ぼうしくゆゑへなるゆ。
ゐなりまゝひしく、縁（きぬ）あおなふ、あ絶人、日もまゐぬれバ、ある
家（いへ）の戸（と）をまゝおて、屋どかるまゐむといへバ、うゑ知おて、
あたていまけるまゐ、あるじ此ゆゑ、おろうしおろうゑ、もち
まるゑのにくさのまゐ、人のつゝゑ乃、おゑりか取るを見
ゑ、いかで此ゆゑ、まゐれてゆゑかし、まゐゑのにしてむ。
ゆゑおもひて、いかるじ、ふさやきいへバ、茗荷（みやうが）をくひまる
人を、おろうゑ、あて、物まゐすれするゑのなりといふをさ

て、あ（菜）たせ乃ゑの、こゑふこやうがを、いまてくゑせつ、さて、いかさ
ゑとゑ、何をぐれ乃ゑふ、おおいでく、まもちてゆおぬ、妻ハ、
まゐ人のまゐすれまるゑの、こむと、祿るとおろにいりて
見まゐバ、ゆやくゑの、ゑとつれしくゑせつるゑやうがハ、志るし
なりわなるまといへバ、あるじいふ、茗荷（みやうが）をもちまゐ有れ。
いらじき物まゐまゐてりぬといふ、妻なにをうまゐすれるゑ。
とゑへバ、まれまあるゑべおかるそ（粮代）のぜに、まゐまゐていまゐわ
ゆゑいへバ、ゆゑおかふくといふ、こゑく、いよくはしまゐ、まゐ
人をもうまゐて、ゑのとしむとして、かへまゐておのれ、換（そん）をし
ゑるまゐふ、はしぐろなるまゐろそ、つゝふまゐじ、絶物ゆゑ
あわける。

○むかしかたなりといへるすゝめあるに是。明衡といへれ
はうせの家にゆきて。孝經論語乃をぐひ。志ばしかし
そ云てむとのふあまねしおどろきて。おもひをちり紀ぬ
ゐなかよりのがまうまいをさく見氣にを入侍ねばおろ
ざしを志るを侍らばまし我ふかまいでゝよりまゝ此
あるまう。都人まそまゝ侍るまゝ。何まぐてあがゆまし。世
中の人うんべにハこころざしあるやうにをてすすめれ
ぞ。志ちにこのめる人をいとすくれて侍わさくを經
論語なむ。注しきまゝかゝ。ゆゑちくにまゐれて。數
おもひて侍ふ。孝經ハ御注にや。安國が侍を清和乃帝の。師
をばとにて。おもふををさくをちひばまどとまむとすらバ。

○

かしまゐらせむ。論語ハまうかんり疏ありしをうしまゐのるれ。
いづまをうといへバ。かゝるわあまりにおもひて殺れしまバゆ
きさらしてかゝ法くりていふなるハ。あまをかまをかゝるゆゑ
らする事。学問乃をもめにて侍しが。うふりしお文字
をこゝろ事く。脊なるかひなのあくわ我えるまいまゞずゝ
して。人にほさらばやとおもひ侍るゝといへハあさひら
河お稱く。すさまじだるおもちして。家ゞて奥ざ奴
りいまゝ事わ。
越前なるなりなる人任はてくこゝやあふのがしむとしする
り。ずざのもくれるまけまバそのまゝりなる男一人奥し
ていでまちあわかへまつおて日比無くのち。なのいへ

らく。あふの夕ぐまゝ。まらうどをむかへつ無し。おもの剛意せ
よかしいひてたなちでのものまゝ。おもかめをすゑく水
仙花あるこさせおもつかのずぎ庭のあるまゝぐうち。
かひたさなぐしきてあるましがおもかめをこつたてやが
てよりおてつかしうちまゝるまゝ云ふひおしあ事あれ何
風しくといふかさちにあるものくなに事おもさしさらび
いふなるハといへバあが国や六郡ながらおしのあり。なかれ国を
河をせてきいといろう侍るまをされおもつより。さるふ
まわゆおかなひ侍まどいまぐかるふものをみず。あふ
こゝやおこそせふこゝへぬけうろものハあるれ。此所まつる
我乃ちいとさふくありけるまといふ。さるハなにをかめづら

しういふぞとこへバかまこそ人くふゆさふしろおむ
のさ紀いでゝありおまめづしかでまにかめづらかなるむ
やしいふくゝ思こてれすのおよ云ぢう事つゝ技はさふ
とバかわかまかゐなわ家のうちれをの見くこゝ物をしひ
こゝむ。ちまもさてゝまらうこふかなりて。ほらひなるとまむ。
伊豫なりなる人未央宮乃尾をてはられる砌を
をゝわ。おまこ道風胡臣乃かゝちはかさず。辛夷とし
行へるものふる。天下にさうれまものこゝとてはゝふを
秘めおまくいづさず。こゝふはさのこゝ。いさゝ風まあて
むと笞をひらさつゝをと紀とりおして人ゝもかこあて
こせなわめのとの夫なりなるをの。此此ゐるまのがま

さて。ありなるがとりこそ。おの砌。ちじめをとめ行ひし時。
いかだ。ゐれ價をゝいづし行へるとこふ。ちさが○百あをて
かひつといへハ舌をおぢめ。おぢろふ男をゝるいつさてく
おそろしおすで。まふ心紀あるひふを侍るゝ物。ゐれをと
をまづ○侍まハおまたをてつゝれるをの。ふて侍わ。かう
さでやうなる物ふしを。おが孫百あのあるひ何なりと家を
侍まハおぞをとめて。あが家ますゝ。侍まし。屋つひ
のあるゝ云ふ。こゝまういやしく。屋をまをの。ふを侍まを
なまといひなる。ゐるゝ人のおろふハさをおをひつべし。
かうざ。ゐれおとをこさて。おちぐし。れ心。おしまをひ
てふるをのめであつかふ人のさしをかしこかうむ物ををて

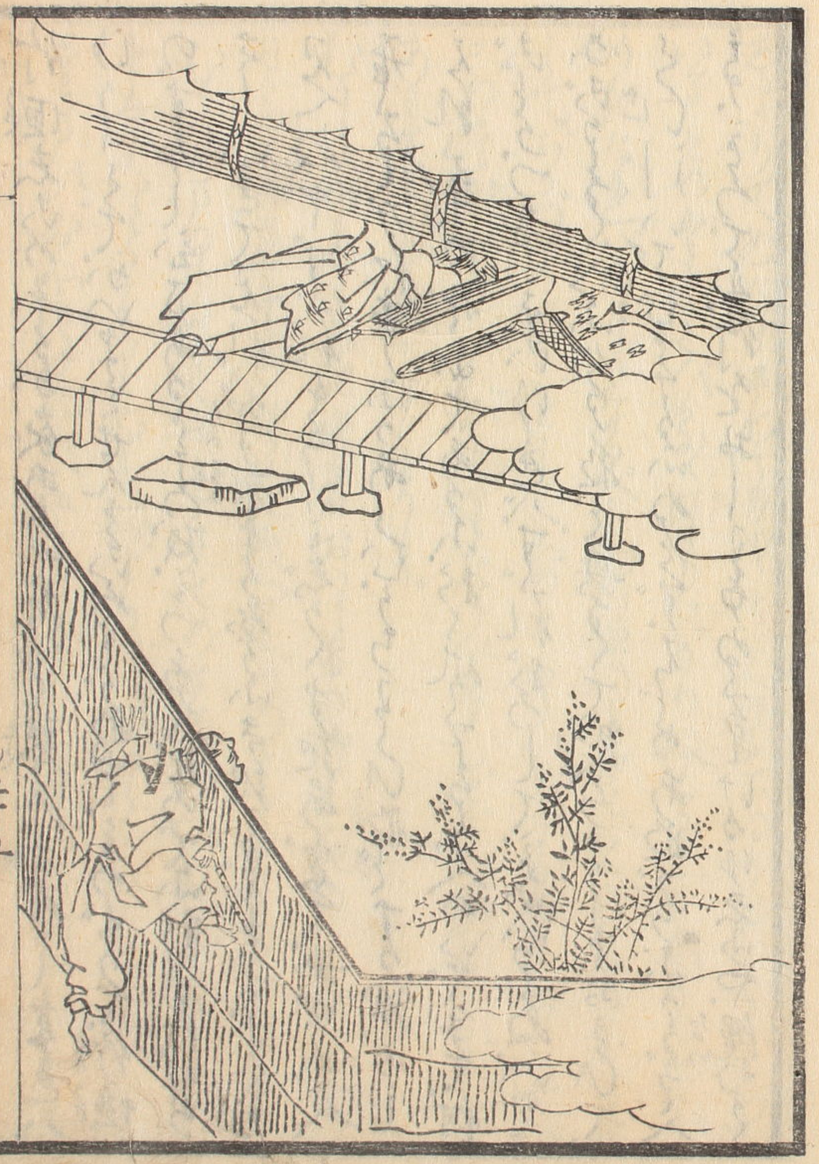
あそびぬまゝハおろぎし殘うしまふまわとろふるまゝ
にもみへまゝふをも
志をすゝ乃おろ小面実（ほくめん）（まゝ）（おち）といふもの志ゝし犯人がわゆゑ
なるゝまあるゞいとさむしまらうどにおまし乃ぬらせを
ぜいへバ門ハおろえくきてさくるゝをこまゝバくゝ両乃皮（かハ）
のあつらかふ志おかハなりなわ さてうち志おて おほし
さらふ志のうるしてありなると犯おろきれく事をまて
志ま皮のうへをかいるでく志なるが法きもれまふ志うち
あゞてあゞ法乃をまうとによくさいへてよ此さとつて
侍りおとひなわ何事のおろふうゞ心くかうあらなく
いひいぐまわなむいとひぶかし

まづしき人ありなるまむろおろよろおびまうしにいでまゝ
むとてずざ乃まさ毎く人を屋とひふやりまるもなれが
ぐしてさろふ者をこれバ衣やまゝあり志えていとさらこ
なげるまゝバかくてそ人まろるまれ毎こさうへておといへバ此
かふハおろをもちてハずといらふさらバ供ま具をむも
なるくかくやうしいらそ用なし かへまねといへバやとひ人衣
のこぐるしまて人まろしとおがさバこちれがど一二町
ゑまさゞるまくほとも法うまろしむそいかりとゞいひなる
さるふそも具（ぐ）せざらむ事をまさりなむやし爲ぞ
初潔（ちろせ）ハあらふるふ志るし見を行とてこやさゝ志をいハ
ずまうでくる人おかゝるまゝ十七八日のおろ法ぞ市のまゝ

里ハ宿(やど)かる人のまいらせず。おしあはせわ屋どのあるじ。二ツまいらせ
はらにゆめうつゞ。わすれなましばかり乃ゆめすべき枕(まくら)をたづねず。いふ
世乃しとおもひしあるが。さしむかひにさて隣(りん)なる木履(きぐつ)を
取よりゆきぬ。二ツあしだを。かりてそて取り出て
まくらとはいふべしとつおの〳〵寐(ね)たづまりて乃ち十ばかり
なる男子ハの枕れまでてめのさめ見れば。かしこなる
ところかし所のせて眠るかやねいりもぬるまにバ
ゆきて雨ふるたびたるまで目をさまし。川かくいくたびとなく
いのりまいらせて祈られざるまじけは親の父をよびおこして来(き)
云とよのまうされたりけるにも祈ずえずして枕していねむり
我どもしけるの。いのりの乃なる寐を寐ずあかしつ観世(くわんぜ)

観音(おん)に祈りまおばげなちやかうふるまなむ。いふかせ乃し此ろに
けるかいとをさわくいとおしうるまなわ。
ごえ法師乃人のもとにとは待て来いまくおや宅にて帰る
きたる道すくゆくりなくゆふぐれちかづるまいでなるかい乃
かさをおろるまあれバ忘やくぬまつていそぐを雨ハすい
とやくなく祈さへすかけすあめおやくまじ。じきさ〳〵妻乃紀室
なしまをあみせく大雲を浄(とが)めても八大龍王(はちだいりうわう)は
あめ志だしやあつびえんとちいのまり〳〵ゆく。雷市(のかつ)
なれハまちよるべ御本乃ずふすし。雨たえずあるまづ
ふりて盆乃水(ゑづ)うちかふる庭うふるまにさても〳〵
庭にあるぶたいなき志のびがてし。法師ちかもめぐたふ

さ絶ぞるまになりて、大地に産し志務き両女に、大きさにこ
えしらおて、空をふりこゝ、急あげく、いひなるを、ふれりし、あれ
り、そぐ姫まに、あまりし、めくらわらしいとり、面にうちあら
しまらせ、いらじおこる名ならむ、とぞよばるまけるに、あらろ
ひがこぬるまの事、ある事じお事をもいひなり、
えせさふらひ、加茂まつまのかへさに、あお人の家に、横笛の
ありける我とりてこうふとさしれおよびをくちに、
いまにわぬりむとすれどぬ事ぞ、はよくこんなむ、指いまして、
まへがつるまなれば、さいの笛まきりひて、むといひて、價をやる、
家にかへ雖ば、ふえうちくぶ絶く、とらまし、とおもひて、指
り法おる笛、されがうちふりてあゆえ切なる、尽に、



竹垣志ぬめそうふ家あるてたくく琴乃書のこし事ハ
ゆうしくてかいまくせんとおろをが船也こゝめぐりて竹垣
のすまひし云乃あるところ哉こつあて、きろでふおしまけから
さしいきてみれバ卵花まりなりふさ絶こぎまして、よくを
みへぬ也すぐれをこしこゝぐくま絶あ事て、如四ゑ人
居るまなに事ふかあらむうちまひ船どする哉めも
なれなずの拵おてあるふおくはなるも人のいでさて何
だとうつぎ、さまゆきバすぐれおろして、こゝにいまぬ、いや
ゑぶるまく入ふなるう船と與すくてかへらゆしとおきひて、
くじ川いでむやするふぬなずかちゆあ船がちふかぐ入
こゝ、きろでふ竹をおしまあぬるまけるゆ志ふや縄つよく

志まりてぬなず、さわとの也きぐ人けまハいよくはげく志まわて
いかそのぞきくびふくばりになりぬくるしさふうしゆう
め絶なまバあるじなるべし竹垣乃きゆふ人の言するハ拵
とて、ちかづまよるをこそ、おのさふひ大なる都志て、いかふ
おのまけかきなれふうまたうびるむとぐいひなるふよくと
あるてまちなまことをとうし。

○むかし志まく志絶姫君おハしあり御衣着絶のよろおじ乃
日とて、女房まち拵ぐ絶あへまめのとるわなる人姫君ふ
むかひ乃ぬらせく、花をこそめさせ行ひてハ、おのふまで
とそおとうなるまぬまバよろ川おいらうふ志づ乃ぬせ
まそ乃ひ、おれどうれ船花をてなしおう、何ら夜有しあまき。

まとひくぐまのなぶ人くまゐらせまうふとを、つやゝ見
いま行ひて、かしげれるにたてなし、なしまゐらせそ、くぐ物
など、持ぼまとめくふ人を、まぐ稽るどもさぬ人のうへ
ゐてはぜなぶ、いまめこさいゆれバうなづう勢語をいつかえ
あわ、とうれし此こゝまて、アリかゝ、さて、四ゝ日を見して、
御母君の出おろしとて、めの此こゝとゝ見れるに所にて栗を
むおくおろく此こゝ居たる紙、云めこさゝ見つゝ行ひて、
まゝそいかで、まざ乃よろしびもまぐせざるしや此まゝ
はしまおいしての事乃ひあわ、女房まちも、おとがひを
と紀く、こゝにつらひ云わ。
学生源乃ゑろしが家につらハあわ、法孫よこまにはあて、文

よむしまとをなるひたるまあると紀、家乃おとれよむかひて、いふ
けるハ、そうしし人そ、すべてあらぬいつたるまとをかつふ
れ歟、学問乃道ハなかく世に用なしといふ、おとゝ何事の
ありて、さハいふぞとこへバ、まらハいふ、李太白集をよゝ
て侍るに、白髪三千丈といへるに句あるも、おれかおるまれさ
おらしまゆしなるぞやといふ、おとゝあらず、つぬしがものまゐ
するまいとの、まらぶまげさる疑ひもいでくるへ、いま大学
り入ゝ、おかざう乃はうせの出まへにく、学問してゐよ、さる
こゝろいハなるにけれ、おもしくかしにて、我云のを此にハ、さ
まゝく、國も四百余州あるまとう、さる云ろおとおろうれバ、さバ
うまゝ髪ながさ人もあらざらむやハ、まぬし論語をバ、よゝ

○

をるべし。かゝ事ゝに、頼淵鬢四間とおもひ見くまれといへば、
ほとへおにくといひて、うなづかなるかとか。
たゞ乃ぞまきといふめすぐ云也。所々おしいま人をおろし物
をぬきむすりとて、こゝやおろ辻く一所ばとに小屋はくまる
ゝ東畳二人ツ、まきわてあれと、検非違使の廳よわ
事まきおろ、なか嵩のものゝをおこるまきなする也。
下司畳東こめぐらひて、嵩人のうぞ殺ひきむべ地の
さぶめに、なわたる。おまきによわて、下司に人あまくそへける
中に、いこじくまづし地人めさまして、おの役にぶくハまけ
ける。大におろおぼて、さのふまでおしこなめ。おしまけ
ものどもに、いおおひ川おこるやどをもゝんを乃こし 礼也。

おろにかゝ乃へ居るまさてこめぐるもありくにて従者三人
ばかり奥すべおまいなるを、おろ人ずざのなりわ三十縁は、
俄に人をやといて、こゝやつまて出ける。まがいへのちり地あるわ
に、嵩れ小屋あるまたにふをちりよりて、嵩人やある也よべど、
いらへするもの礼し、いらちて、大おきによべバ、むろひなる。竹垣
の門の中よりも、光かぐるまたる翁出さて、ついめてぬかづ。
おのれ嵩人かといへバ、さに侍るまといらへ、いかで小屋をあたく、
嵩をでそあるぞ。おちやあれ作せいと殺。さやうぐに出
てあるかつそぬ法ゝ礼わ。刑當の廳にまて、ら地めこせてん。
おのれまきぞ。なのませとといへバ、翁かしおまりて、やつれ
まおとそ嵩人にくハ也ハず。むろひなる家の門をわにて

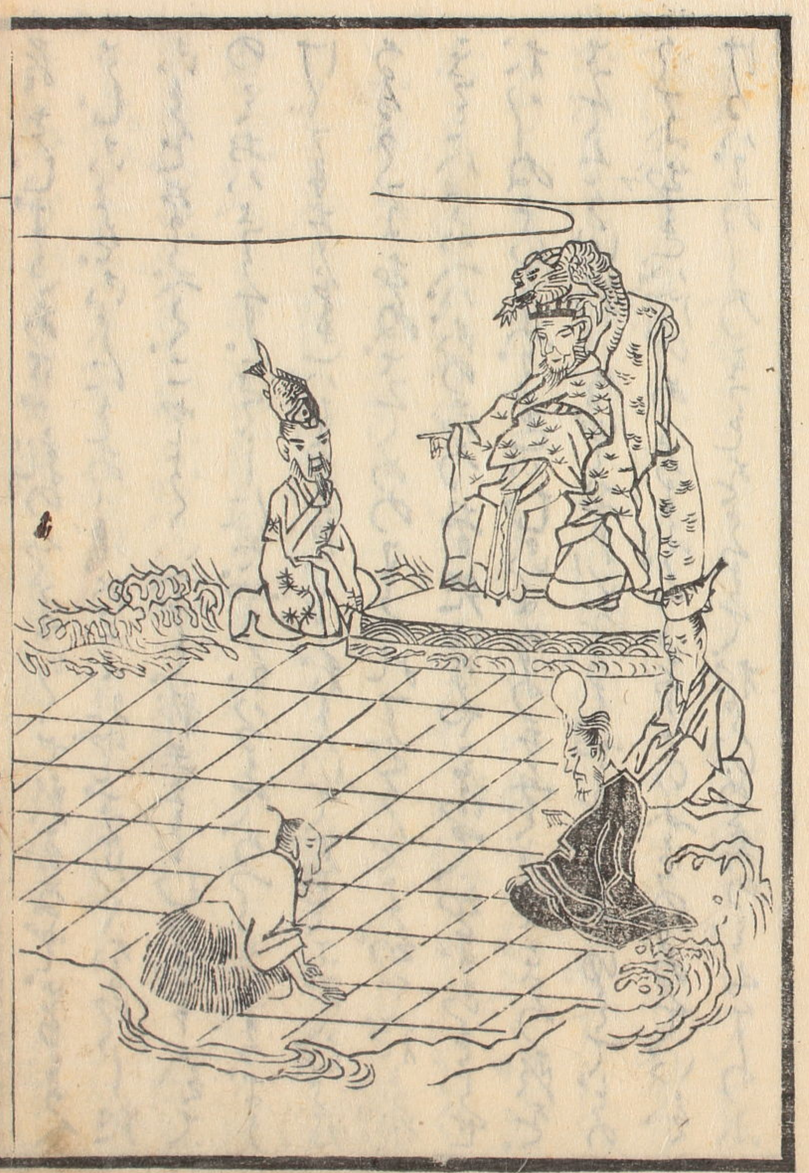
侍まで。ぞゞいふなど。たゞし小屋にあるをまちうけはあなた
てあれ。所もその手にて侍るも。さる成るを。とらせ行く。まし
うらを。とめ行すなはち。まちどの番人のいでたちをとまり
まうけいてとらせ給ひねと申す。さしバ乃ちどの番人ハ。いづ
くにあるといへバ。あやしの問屋(ふびやう)なりけるまゝへで。おやの家に
かへりて侍るよし。さまで三人所に定まりける。番人すれバ。
いざ番人ハいかで。いふにぞあらざる。いづくにゆきける所といへど。
義まで。おぢかしおかまうるけをふかくいひく。もどりいふにや。様
あらざるやうやある。いくくよせむまゝば。翁まうくにかしら
をさげて。かすかにはなでゝでうるものへども。せめてもとらせ
行へバ。告(つげ)なきふちら所持に見(ぐ)じ。行く御太刀持る

者也し。丈くらべをもつくる男あり。其の番人にハ。仰へとらせハす
あしをちかくくるうけまど。今しくいふにてまゝ。番すべ。おちの
小屋にあらざるところゆゑ。おぼつかなくせおいとられ。そいびかる事
あらバ。厩(ちやう)よ中さむずる。ぞと。いへで。太刀をもち。かさをもち。二人
あつかひ地よりちはなくおのちさるまいと仕らじ。仕ふバるを
かくて侍るん。とぞいひたるうちなるところで。なるべしとハ。よのつね
あらまほしからん。人乃かるもはなくけるとろ。
某(なにがし)乃入道(にうだう)より人あまた人のもとよる。柳(やなぎ)乃おもし枝を
もらひてちまゝ。庭(かは)にさしておわりまそてだやしてつかひける
あらバ。ひひたるごとく。垣(うき)乃あるふさいせつさしてみどりなど
入させて。めでをもてなするよくせるもそ。とあまゝ。といひつぼ変ぬ。

まらハそのおよるまずのおふれ机をていでてなるいしつゝ柳
海をわをるゝ七日ばかりをすぎして入道庵よりわたちて
此柳おどりやめよれ乃しとおもひつる我さをせげるゝ
乃わをまいをうぞ海をるまけるかゝあわとてわらハをかめ
けるまゝ行る事ても東の乃に子どもれ入来て知おぬるむふ
事志わてとがめむやうもあらじをかしおくも東入おぎわ
けるよといへバ乃ハ志てわかれに袖かおあハせてさふて仰わ
東の乃にぬきとられ事ふハ事わ法るかいなしとおもひ行
へく例も神東を絶ぬまゝハ知おぬ也て筥ふをさめ
て東ぬく後ぞさし仰わ法るといふ入道もあされて大
くちゐろげきたれおたむおしくまらハれ乃わきの

おすじ乃ハまぐこ入道のことふ余まさでちくれことより
ありけると絶まづ志くてふすゐぐになるわ乃れバ東ハまらを
志まてふしなるまらハ人のおふてもたぐらずまらふあ
すふと我いふけまゝバ父知るふ志るまそ人まろし乃と
だしおいひろふ志乃さて孫なるふるまよと楼をしへる
ある何しさちく起出くまらうどくこのかゝるまして居る
ふ元ぞうしまよらまべのかるまてありける我乃ハこゝろ事
そくてこさ可このきまいて事元ぼうしまふすゝ乃知とすぢ
かゝまく仰るといひけるふあ船うそしやれ
丹後国よ志まゝる男ありけるゝ鴻が子男事をつゝ
こさて我もいくで龍家よりくこむとて法也ふ濱ばらま

出てさる事よいある紀にる龜のふしなる紀にておまきや諸家
のあ案内いかとて甲乃うへに結るまゝにしるがおくふとつ志ゝ
りなれ男なりけまバかめをおしにうそれて知しげ死にる
ことおかゝる紀さまどあるまず乃にうゝ龜に出るさ乃
よいありさあるにあるゝあてやゝなる女いでさく口れを
諸宮の法ゝいれるゝいざまを乃へといへバうまゝ志くゝいかに
して仰ゝ乃にしまなしかゝ籠乃やあるとゝへバ女を紀ゆち
大なるかめとなりて沖乃ゝ紀さしてあゆむをおろえつ
とて居ゞてのるまてりにわさて龍宮にいたりゝ諸宮乃
御前にまゝるまて見まゝをいゝ志にはたものゝ作り。み
りゝ山にすめるむかでれるとも屋にて対おとしてまゐ



志之のすみか物語下終

此書五老石川子所著也余嘗
在東都時借鈔其家須日書
肆東壁堂乞上梓之乃校正
以與之
甲子孟春　尾張　朝田保清識

文化第二乙丑春開彫

書肆　大坂唐物町　河内屋太助
　　江戸山下町　萬屋太次右衛門
　　尾府玉屋町　永樂屋東四郎梓

神代正語	同右	全三冊	
同	七帙		
同	六帙		
同	五帙	従廿四至廿八	全五冊
同	四帙	従十九至廿三	全六冊
同	三帙	従十二至十八	全七冊
同	二帙	従六至十一	全六冊
古事記傳初帙		従一至五本居大人著	全五冊
神壽後釋	同上		全二冊
古今遠鏡	同上		全六冊
源氏手枕	同右		全一冊
天祖都城辨〻	同右		全一冊
玉〻〻帚	同右		全一冊
御僊行長歌	同右		全一冊
玉勝間初篇	同右		全三冊
同	二篇	同右	全三冊

萬葉集畧解 千蔭大人著 全三十冊

初帙 從一至五 七冊

二帙 從六至十一 八冊

三帙 從十二至十五 八冊

四帙 從十六至廿終 七冊

志之乃其みの物語 石川五老大人著 全二冊

此書は當世乃おもしろくおかしき俗談ありたまて尤無所る我思ふ其文雖ハ宇治拾遺物語乃雅文ありて陰入せ事し初学作文の助きなる面白き書なり

俳諧歳時記 著作堂先生著 全二冊

此書ハ俳諧のこゝに限られ詩歌連俳其用也まへて四時乃諸祭神事佛會其古事等古書書出所を持て此書の如何なるこやくらを記せ此書一本を以て數百卷の周我なまへ

地名字音轉用例 本居大人著 全一冊

歷朝詔詞解 同右 全五冊

玉小櫛 同右 全九冊

萬我乃ひ連 同右 全一冊

葛花 同右 全一冊

和歌古今選 同右 近刻 全一冊

遷宮物語 菊谷先生著 全三冊

將門記 大須本 全一冊

和名抄 大須本 全一冊

尾藩書肆東壁堂藏版目錄

名古屋本町通七町目玉屋町 永樂屋東四郎

劉向說苑纂註 關玄洲先生著 全十冊

律數揚搉 同右 全三冊

補義莊子因 秦滄浪居先生著 全六冊

今世說 同右 全四冊

古詩紀古逸之部 同右 全五冊

詩韻含英平聲之部 同右 全二冊

同摘註 同右 全二冊

同灰聲之部 同右 全二冊

蒙求續貂 恩田巵園先生著 全二冊

重修韻畧 同右 全一冊

懷寶三重韻 全一冊

掌中三重韻 黃楊版横本 全一冊

懷寶以呂波韻 全一冊

袖中以呂波韻 横本近刻 全一冊

大學參解 鈴木叔清先生著 全一冊

謝菴遺稿 同右 全一冊

劉向列仙傳 岡田暢園先生著 全一冊
鄭玄註孝經 同右 全一冊
常語數 同右 全二冊
畸人詠 同右 全一冊
秉穗錄 同右 全二冊
同二編 同右 全二冊
彼此合符 同右 全二冊
物數小謂 同右 全一冊
暢園詠物詩 同右 全一冊

夏小正 全一冊
四書集註 道春點 全十冊
牧民忠告解 全一冊
女誡和解 樋口萬山先生著 全一冊
宣和集古印史 千秋餘先生撰 全一冊
掌中聯語苑 暢園先生著 折本 全一冊
初學詩材 川内先生著 全二冊
文字攷 楊州石天基著 全一冊
日本詠物詩 伊藤先生著撰 全三冊